

たかがゴシップされどゴシップ

— ゴシップという「真理」—

岡本昌雄

序論 ゴシップは愉しい（か？）

人のうへいふを腹立つ人こそ、いとわりなけれ。

いかでか、いはであらむ。わが身をばさし措きて、さばかりもどかしくいはまほしきものやはある。（『枕草子』、第二百五十二段）

いまさらの清少納言、横書きの『枕草子』とはなんとアナクロ、無粋の極みと言われそうだが、寛大なるお目こぼしを。数ある現代語訳の中でも、ここはひとつ『たのしい・わるくち』の著書もある、酒井順子のそれを引かせていただく。「人の噂をするのに腹を立てる人って、まったくやりきれない。どうして言わずにいられるの。自分のことは棚に上げて、他人の噂ほど話さずにいられないものが、他にある？」（酒井順子『枕草子 Remix』⁽¹⁾）。

そこまで言うかという気がしないでもない。しかし一方では、思わぬところで同好の士にめぐり合ったようで、縁遠かった古典が急に身近に感じられる思いもある。なるほど『枕草子』は今日でも Remix に値するものかと納得させられる。

平安の才女のようにゴシップがなよりの好物と公言する人は少ない（多いか？）のではあるまいか。公言はしないまでも、噂話に思わず膝を乗り出し、

したり顔で相槌をうっている自分を意識して苦笑いをしたことはないか。気の置けない者同士が久しぶりに会って、「ところで」と声の調子を落として、共通の友人知人の消息についてひととき噂話に耽る。

しかし言うまでもないことながら、ゴシップ・噂話は世間的にははしたない、不謹慎なこととされている。ときにはその人の品性を危うくすることにもなりかねない。よそ様から不謹慎の誘いを招くだけではない。それ以前に噂話に興じる自分の中にながしかの後ろめたさが兆す。悪趣味、下劣と謗られ、品性を疑われ、後ろめたさまで感じながら、それでもゴシップ・噂話に魅かれるのはなぜか。「他人の噂話ほど話さずにいられないものが、他にある？」とまで言わせるものとは何か。

はしたない悪趣味とされるせいか、ことあらためて「ゴシップの魅力」などと正面きって考えたこともなかった。そこはそれ奇特定の人もあるもので、タイトルもそのものずばり、*Gossip*⁽²⁾とあり、ゴシップの「問題の所在」(Problematics)に始まり、文学・哲学・心理学など種々の領域の文献を渉猟するれっきとした学術書である。余談ながらというわけでもないが、清少納言・酒井順子・Patricia Meyer Spacksと、ゴシップにぞっこん肩入れしているのが女性というのも何かの暗号か。

スパックス女史によればゴシップの魅力は以下の四つに大別されるという。「窺視の悦び」(Voyeurism)、「共有された秘密の愉しさ」(Shared secrets)、「物語の喜び」(Story-telling)、「禁忌を犯す快感」(the shrill of the forbidden)⁽³⁾。

そうか、そうだったのか、思い当たる節が多々ある。確かにダブリンの新聞広告取りの日常、彼の内面も好奇心をそそるが、それ以上に旧知の彼・彼女の消息から浮かび上がってくる、真実ともフィクションともしれない悲劇・喜劇・悲喜劇、それを覗き見することの密かな悦び。おそらく噂される人の家族でさえ知らない秘密をこちらの二人あるいは三人だけが知っていることの快感。こ

の快感と背中合わせの後ろめたさも「秘密の共有者」がいてくれれば大いに軽減される。一人でゴシップをもてあそんでも面白くもなんともない。ゴシップはそれを共有してくれる仲間あってこそだ。一人で秘密を抱えているのはつらくなるが、仲間と共有される秘密となれば格別の快感となるのか。

「ところでお聞きになりまして、あの方のお話？」というゴシップ・噂話の切り出しの常套句はそのままでも物語・小説の発端としても十分通用する。普段よりトーンを落として話し始める彼女も、膝を乗り出して聞き耳を立てる人も実はなんのことはない、物語の語り手と聞き手の悦びをそれとは知らずに享受していたことになる。ましてや、登場人物、ヒーローやヒロインが共通の知り合いとなれば、凡百の柔な物語を圧して格段の強度で胸に迫るではないか。

日常の会話ではためられる類の話、家族一族にまつわる外聞をはばかる秘密、財産・遺産相続にからむどろどろした話、大げさに言えばこれも禁忌の侵犯となろうか。不謹慎をあえて犯し、その見返りとしてもたらされる、えもいわれぬ悦び。

スパックスはゴシップの魅力を次のように締めくくっている、「ゴシップが力を持つのは、他者の経験を想像的に所有することを通じて得られる、支配するという幻想によってである」⁽⁴⁾。

「ゴシップの悦び・愉しさ」とは、擬似支配のもたらす愉しさということだったのか。たとえばほんのいつときとはいえ、人の人生を覗き見し、それをさかんに他人の人生を操る、すなわち人の人生を我が物とすることだったか。

ゴシップに耽る愉しさ、しかしもちろんこの密かな悦びの隣り合わせには恐ろしさが張り付いている。噂・ゴシップに興じる人がいれば、当然のことながら噂・ゴシップのスケイプゴートが存在する。たわいのない程度で済めばいいが、たとえば禁忌の侵犯となれば只事ではない。由々しき深刻な事態ともなる。そう、今もどこかで交されているかもしれないあなた自身の噂話。まことに「たかがゴシップされどゴシップ」なのです。ゴシップを侮ってはいけません。

「他人の噂ほど話さずにいられないものが他にある？」これを口にしたのが清少納言ならぬジェイン・オースティンだったと聞いても、いささかも不思議とは思わない。それどころか、「やっぱりそうだったか」「さもありなん」と膝を打つばかりだ。

I よりによってオースティンでなぜゴシップ？

「オースティンとゴシップ」と聞いてなにを思い浮かべるだろうか。早合点の読者は、原稿の下書きを台所のテーブルに置いて、家事の合間に書き進めたという例のエピソードのことか。それとも、万事につけ控え目で地味な人生を送り、生涯独身のまま逝ったオースティンのただ一度の秘められた恋愛のことだろうか。前者は無名だった「天才女流作家」をめぐる、ほほえましいとされる益体もない作り話だろうし、後者も、そういうことはあったかもしれないが真相は闇だ。BBCやハリウッドの脚本家なら、ここぞとばかり飛びつくかもしれないが、当方の目下の関心ではない。

「オースティンとゴシップ」といっても、別種の反応も予想される。「優雅・静謐・調和のオースティン」に長年馴染んできて、オースティンに深く肩入れしてぞっこんの読者のことである。こういう読者からすれば、敬愛してやまない Dear Jane にゴシップを持ち出すなど言語道断、とんだ言いがかり、見当違いもはなはだしいとされよう。「ジェイン・オースティンの読書会」の熱心なメンバーからは、「なんという不謹慎」「この罰当たり」「オースティンにゴシップなど云々するのはよっぽどのひねくれ者、偏屈」、そんな罵声を浴びせられることになるか。

でも、ちょっと待ってほしい。オースティン・ファンクラブや 'Janeites' のあいだであればいざ知らず、そうした「伝統的オースティン」についての見直し、「棚卸し」はすでに一通り終わっているのではないか、あるいは終わって

久しいと言うべきか。そう、「正典」(キャンオン)としてのオースティンの洗い直しである。

そうであればここでは、この洗い直しのほんの一端を駆け足で見ておくことにしよう。なにはともあれ、伝統的オースティンの再検討を促すことともなった文学批評・研究の場の「地殻変動」について富山多佳夫氏の証言を記しておく。

「文学批評は、それまでのように自己完結的な言語の構造としての作品の美しさを味わい、その魅力を——ときには分析的に——語るのをやめて、作品とは多方向の力がせめぎあう不安定なシステムであると考えようになった。作品に内在する美しさなるものは、諸々の力によって演出される、ひとつの多重決定的な状態以上のもではなくなった。美と調和から不安定な諸力の均衡への移行である」⁽⁵⁾。

「永遠の価値とか人間の真実とか言語の美とかいったものを基準とするかわりに、ジェンダーやセクシュアリティやネイションなどを座標軸として選びとるとき、文学自体のとらえ方は大きく変わってくる」⁽⁶⁾。

ここで言われている地殻変動的ともいうべき批評・研究の変化をオースティンに即して確認しておく。古いところでは、「歴史を超越する、無時間の中のオースティン」が主張されたことがあった。これについてはすでに、M. Butler の *War of Ideas*⁽⁷⁾ や Duckworth の *Improvement of Estate*⁽⁸⁾ が徹底的にオースティンを「歴史化」し、同時代の政治的、社会的文脈の中に位置づけている。あるいは「正統としてのオースティン」を決定づけるのに貢献したのが「倫理的オースティン」と「美と均斉のオースティン」だった。この、いまもってその存在をしぶとく主張する「オースティン」にたいしては、サイードが『文化と帝国主義』⁽⁹⁾ のなかで、『マンスフィールド・パーク』の美と倫理を支えていたのは植民地アンティグアの農場経営だったとして、「帝国主義に加担する

オースティン」を突きつけた。参照すべき座標軸をずらしただけで倫理も美もとたんに足元が危うくなる。サイドの読みによって、不動と思われたオースティンの美と倫理の世界は大きく揺らぎ、相対化された。

それほど目立ちはしないが、しぶとく居座っているものに、「緑なす、有機的共同体のオースティン」もある。これについては、オースティンの研究者でもなければ文学専攻でもない、およそ畑違いのところから異論が提示された。*Regulated Hatred*⁽¹⁰⁾でハーディングはオースティン小説における「ご近所のスパイ」を洗い出し、憎悪という七首を呑んだオースティンを論じて、オースティン研究に貴重な一石を投じていた。

「恋愛と結婚のオースティン」、オースティンとくれば男女の愛と結婚であり、それこそオースティン文学のアルファでありオメガとされてきたものだ。しかし盤石と思われた「恋愛と結婚のオースティン」、異性愛の総元締めと目されたオースティンにたいして、“Was Austen a Gay?”⁽¹¹⁾という爆弾発言をして物議をかもしたテリー・キャッスル、あるいはセジウィックは‘Jane Austen and the Masturbating Girl’⁽¹²⁾において、オースティン小説における異性愛的欲望に疑問を投げかけた。

あるいは、人間の滑稽な弱点、愛すべき欠陥を優しく包み込むアイロニーの作家オースティン。しかしこれも疑わしい。そうではない、ふんだんに毒を含んだ、危険な笑いとアイロニーこそが、この作家の真骨頂ではなかったか。正統を、体制を転覆しかねない過激なオースティン。

ことほどさように、伝統的・正統的オースティン像は至るところで歪み、ひび割れし、揺らいでいる。ことはオースティン研究の場だけにとどまるものではなかった。

文学研究・批評の場における座標軸の転換と軌をいつにしてと言っているのだろう、ゴシップはその不名誉な出自にもかかわらず、現代思想の表舞台に登場した。「知識・文化は社会における権力がそれを通じて作用するメディアと

なる」とはフォーコーの説くところである⁽¹³⁾。現代思想の新たな洞察は、ゴシップも知識や文化と並んで、人々への束縛・監視・規律になることを教えてくれる⁽¹⁴⁾。ゴシップは権威的な規範にたいして、団結して対抗するどころか、支配的規範それ自体を強化・補強するとされる。

オースティン批評にあって、ゴシップは従来、前述の同性愛、不穏な共同体、毒のある笑い、帝国主義とともに、オースティンとは無縁のものされてきた。そういう話題を持ち出すことは正統オースティンを汚すもの。しかし今日、ゴシップやご近所のスパイ、同性愛、亀裂を抱えた共同体、人を刺す笑い、これらのテーマは正典オースティンの陰に隠れて見えにくかったところに照明を当てることになるのではないか。それぞれのテーマはオースティンに無縁どころか、オースティン文学の本質・中核をも明かしてくれるかもしれないのである。オースティンがゴシップを介して現代思想と繋がるのである。

II 「女の言説」としてのゴシップ・噂話

1 ゴシップ的オースティン小説の世界

“Have you heard the news? Mr. Elton is going to be married.” (*Emma*, Vol. II, chap. 3)

“Oh! Miss Woodhouse, what do you think has happened!” which instantly burst forth, had all the evidence of corresponding perturbation.” (*Emma*, Vol. II, chap. 3)

“My dear Mr. Bennet,” said his lady to him one day, “have you heard that Netherfield Park is let at last?” (*Pride and Prejudice*, Vol. I, chap. 1)

“I have a piece of news for you. You like news — and I heard an article in my way hither that I think will interest you.”

“News! Oh! Yes, I always like news. What is it?” (*Emma*, Vol. II, chap. 3)

ときには一語か二語の短いセンテンス、ただでさえ短いところに疑問符、感嘆符が張りついて、ニュース・噂を伝える側の息せき切った様子、身を乗り出し固唾を吞んで相手の口元を注視する周りの人々の有様が手に取るように伝わる。「他人の噂ほど話さずにいられないものが、他にある？」を実感させられる。

ときおり村の有力者のあいだで開かれるディナーや舞踏会を除けば、事件らしい事件などめったにない、停滞と退屈の共同体。そんな眠ったような村を唯一目覚めさせ活気づけるもの、それがニュース・噂話・ゴシップだった。

「ねえねえ、お聞きになって？」とはオースティン小説の世界が、それによって起動し、それをきっかけにプロットが展開してゆくといってもいいくらいだ。結婚のニュース、ご近所に移り住んだ、大金持ちの独身男性にまつわる噂話、村の牧師に嫁いできた女性についてのゴシップ、彼女の実家の財産から、所有の馬車のこと、果ては家の内装・調度に至るまで、尾ひれがついた噂話・ゴシップが村じゅうを飛び交っている。

あるいは、そうした文字通りゴシップとして伝達・流布されるわけではないが、ゴシップ・噂話に目のない私・あなた・読者には舌なめずりしたくなるようなエピソードが目白押しである。

地方の名門の当主が亡くなり、未亡人と三人の娘が残される。未亡人は後妻で、先妻とのあいだには息子がおり財産は遺言によりこの息子が相続する。息子は臨終の床で義理の母と腹違いの娘たちが暮らしに困らないように出来るだけのことはすると約束した。はじめのうちこそ、亡父との約束どおり大枚三千

ポンドを彼女たちにとし、己の気前のよさにご満悦。ここで予想通り、無神経でがめつい嫁が登場し、もっともらしく、身勝手な理由をつけては、援助の金額を下げてゆく。最初は千五百に、すかさず、「人間って、年金が入るとなると、ずいぶん長生きするものよ。お義母さまはとて丈夫で健康そのものだし、まだ四十前よ。……」結局は五十ポンドとなり、最後には遺言を都合よく読み替えて、「季節毎のお魚や猟の獲物を届ける」だけとなり、金は一切出さずじまい。

遺産相続、先妻と後妻、嫁と義母義理の姉妹、それぞれの思惑が複雑に絡み合い、金額が少しづつ減ってゆくところ、人間のあからさまな欲望が、善意・共感と約束への義務感を徐々に駆逐してゆくところなどはゴシップの中でも、めったにお目にかかれない、極上の部類に入るのではないか。そのうえ、「年金が入るとなると、人間長生きするもの」という今日でも十分通用する名言・至言まで聞ける。

そうかと思えばこちらは、由緒ある歴史を誇る名門の当主、准男爵である。一族の歴史が麗々しく記されている『準男爵名鑑』が唯一の愛読書、暇さえあれば掲載されている、わが一族の社会的地位に思いをはせ、密かに悦に入る、そんな虚栄心の塊。しかもこの準男爵若い頃からの美男子で、五十四歳になる今でも己の美男振りが自慢の種というのだから始末に悪い。「自分の容姿と社会的地位にこれほどご満悦になれるのは、新興貴族の召使いでも珍しいだろう」とは作者オースティンの辛辣な一撃。そういう人物が派手な浪費がたたって経済的に逼迫し、いよいよ屋敷を処分というところまで追い込まれた。

己の美貌と卓越したステイタスを反芻しては悦びを噛みしめるという、常人には思いもよらない心の働き、しかもそれが、やんごとなき準男爵、名門の当主の夜毎の密かな悦び、さらにさらにそういう人物の台所が火の車で落ち目となれば、これ以上のゴシップ・噂話の好餌はないだろう。ゴシップの魅力の「てんこ盛り」だ。この場合のように読者は直接ゴシップの輪に加わって、美

美味しいところを存分に味わい、秘密の共有者になることもあれば、ゴシップに耽る連中を遠くから見て、蔑み、呆れ、幾分かは羨ましく思い、そしてため息をつく。オースティン小説を読む悦びとゴシップ・噂話に興じる悦びとどちらがどちらか見分けがつかないくらいだ。オースティンの小説世界はそれ自体がゴシップの集大成のごとき観を呈している。

2 「女とゴシップ」という神話

ところで、“Have you heard the news?”を「ねえねえ、お聞きになって？」としたのはお気づきだろうか。そう、ここはなんとしても「女言葉」でなければならなかった。実例として挙げた先の引用もミス・ベイツ、エマ、ベネット夫人、ハリエット・スミスといった具合にどれもが女性の発言だった。スパックスは「ゴシップ・噂話は女の専売特許」という今日でもなじみのフレーズに触れて、「女はくだらないおしゃべりを、真面目、深刻な話題は男の担当、こういう神話がある。17, 8世紀イギリスでは、男は哲学と歴史を考え、女はロマンスを読むとされた、このロマンスは美しいヒロインの、手に汗握る運命を語るもの」⁽¹⁵⁾としている。このおよそ根拠のない、男の身勝手な思い込み、それでいて根強く流布・浸透した見方、オースティンはしかし作品の中で基本的にはこれを採用している。『エマ』の男性ヒーロー、ジョージ・ナイトリーにこう言わせていた。「以上が「なぜ、いつ、どこで」というきみの質問にたいする答えだ。きみの友人ハリエットに会えば、もっとくわしい話が聞けるだろう。女性はこまかいことを興味深く話すのが得意だからね。われわれ男は要点しか話さない」(『エマ』54章)。

「口うるさいといったらありゃしない」ゴシップ屋の彼女たちの活躍ぶりを見ておこう。

「ウェストン氏は翌朝ハイベリーに出かけて、ジェインがまだ知らない

たかがゴシップされどゴシップ

とわかると、このニュースを彼女に告げた。(中略)だがミス・ベイツもその場に居たので、このニュースは当然コール夫人に、そしてペリー夫人に、そしてエルトン夫人にあつというまに伝わった。これはエマもナイトリー氏も覚悟していたことだった。ウェストン夫妻に知らせてからどのくらいでハイベリーじゅうに広まるかを計算したほどだった。村じゅうの家庭で晩の話題になって、人々を驚かせているだろうとふたりは想像した。(『エマ』53章)

場所は「ハイベリー村の二流三流の人たちがしょっちゅう出入りしている」ベイツ母娘の居間、「ついさっきコール夫人がお見えになって、十分のつもりが一時間もいてくださって、ケーキも食べてくださって、とてもおいしいとおっしゃってくださいましたの」。

「コール夫人の名前が出れば、つぎはエルトン氏の名前が出るに決まっている。コール夫妻はエルトン氏と仲良しで、彼がバースへ行ってから手紙をもらっていた。これからどうなるかエマには察しがついた。また手紙の内容を聞かされるのだ。エルトン氏はバースに行つて何日になるのか、いろいろな人とのつきあいでいかに多忙か、どこへ行つてもいかに人気者か、バースの儀典長主催の舞踏会がいかに盛大か、といった話がえんえんとつづくのだ」。(『エマ』19章)

「ミス・ベイツはまた、たわいのないことをえんえんとしゃべる、たいへんな話好きであり、ウッドハウス氏のお相手にぴったりだった。ウッドハウス氏もまた、こまごまとした情報や罪のないゴシップが大好きなのだ」。(『エマ』3章)

「噂は千里を走る」とはこのことか。携帯顔負けの、水も漏らさぬ連絡網とネットワークには目を見張るものがある。一人だけ、ゴシップ好きの男がいるが、彼はいまや男を降りた老人で、女性以上に女性的という設定である。共同体であって、コミュニケーションの「インフラ」を担うのは女たちだった。ニュースを伝え、ゴシップに花を咲かせては喜び驚きを共有しあう女たち、確かにそこには女たちの仲間意識と連帯ともいうべきものが醸成されている。

この噂話・ゴシップの中心にいるのがミス・ベイツである。村の元牧師の娘というだけで、有力者たちの圏域にかるうじてぶら下がっている、無類の善人、しゃべりだしたらとまらない「口うるさいといったらありゃしないゴシップ屋」、いまや人からの施しを受け、零落寸前の彼女がどうして現在の地位を保っているのか。

批評家によっては「聖なる愚者」とも評される、この「若くも美しくもお金持ちでもなく、結婚もしていない」、負のカードしか持たないミス・ベイツの力はどこから生まれるのか。J. P. Brown は「共同体の寛容さを表象している」からだとした。「ミス・ベイツはハイペリーの象徴的存在といえる、あらゆるゴシップがミス・ベイツの空っぽの心を通してゆくように、あらゆる階級がミス・ベイツの中で結びつき協力しあうことになる。彼女はハイペリーで起こること、今まで起こったこと、そのすべてを貯えている宝庫である。彼女の小さな家が古い秩序に属するジェントリー、新興成金、そして下層中産階級の人々を結びつけることになる。ミス・ベイツはハイペリーの流動性と移動可能性を表象する、ハイペリーは過去と未来の両方の階級が混在することを許容する、その寛容さを表象するのがミス・ベイツである」⁽¹⁶⁾。

ブラウンの見方にも一理はあるだろうが、そうした抽象的意味合い以外に、ミス・ベイツはときにはゴシップの出所、ときにはゴシップをリレーするという現実的な役割によっても、共同体での磐石の地位を確保していたのではないか。周囲の人々に窃視の悦びをもたらし、秘密の共有者の愉しみを与えること

で、女たちの連帯の要となってきた。

ミス・ベイツ同様に、その出自からして共同体の中心からは程遠い周縁に位置するハリエット・スミスも、若いながら（十七歳）、ゴシップの伝達と流布にかけてはミス・ベイツにひけをとらない。「(ハリエットは) 夢中でエルトン氏の話をした。ナッシュ先生から聞いた話をうれしそうに話したのだ。ペリー医師がゴダード寄宿学校に病気の子供を診察に来て……」（『エマ』8章）といった具合で、彼女の伝える噂話・ゴシップは M. Butler の指摘にもあるように、「噂の連鎖」⁽⁴⁷⁾を生み出し、それは共同体の有力者の知り得ない、下位の人々の動向を教えてくれるもの。

ヒロイン・エマもゴシップの魅力に一役買っているとはいえないか。悪名高いエマの「マッチ・メイキング」、観察と想像と思ひ込みによって、男女を結び付けようというマッチ・メイクの悦びとはまさしく人の人生を勝手に操作するというゴシップの魅力そのものではないか。あるいはエマのジェイン・フェアファックスをめぐる不倫・略奪愛の想像、というよりは妄想はこれまた、覗き見、秘密の共有、不倫物語の悦び、すなわちゴシップの魅力を味あわせてくれる。

「女の言説」としての噂話・ゴシップを見てきたのだが、ちなみに「男の言説」とはどんなものだろうか。「ナイトリー氏は治安判事をつとめているので、土地で起きた問題について、弁護士の弟に法律的な質問をしたり、面白いエピソードを披露したりした。それにナイトリー氏は、ドンウェルの農場主でもあるので、来年はどの畑で何を作るかといった話をした。（中略）排水溝の計画、柵の取替え、大木の切り倒し、それに、冬蒔きの小麦やカブや、春蒔きの小麦をどこに植えるかといった話題に、弟のジョンも兄に負けないくらい強い関心を示し、兄の話に説明不足の点があれば熱心に説明した」（『エマ』12章）。排水溝や小麦やカブの話など、まるで実用一点張りの、この有様では多彩な魅力に富む「女の言説」としての噂話・ゴシップにおよそ太刀打ちできっこない。

これなどオースティン一流の、真面目・深刻とされる「男の言説」への皮肉あてつけだろうか。

スパックスは、ゴシップを支配的男性的規範の足元を切り崩しかねないもの、支配的男性的言説に取って代わりうる、女性特有のもう一つの言説として高い評価を与えている。男の個人主義的、断定的、理詰めと言説に対して、女の愛情、協力、社交に基づく言説は女たちの下位とされる文化を形成し、そこで接着・結合の役割を果たすとする⁽¹⁸⁾。絆としてのゴシップである。

この項を締めくくるにあたって、興味深い指摘を記しておこう。

「アガサ・クリスティのマーブルものは、オースティンの探偵小説版と言ってもいいくらい。村の住民の中でも身分のある老嬢や未亡人たちは「お屋敷」の人たちと交際し、絶えず村の噂を伝えるが、これも『エマ』のお屋敷の老ウッドハウス氏のもとに集まる老嬢や未亡人たちと同じである。儀式のようにきちんと繰り返され、同じケーキとサンドイッチとともに味わう午後のお茶、時に催されるお屋敷での晩餐会など、永久に変わらないかのように秩序正しい日常生活の快い退屈さも同じである。

儀式化された交際と日常の些事と噂話で出来ているこの世界は、本質的には女性的なものであると言えようか⁽¹⁹⁾。

III 監視・束縛・規律としてのゴシップ

1 「されどゴシップ」

スパックスはゴシップ・噂話を本質的に恵み深いもの、人々を結びつける絆を生み、連帯を強化する、「女の言説」として称揚した。取るに足らない話、底上げされたフィクション、無責任な憶測も含めて、ゴシップとしての「女の言説」を、その絆ゆえに、支配的「男の言説」に対峙し対抗する「もうひとつ

の言説」としてこれを位置づけた。

しかしすでに触れたところだが、女の言説が愛情、協力、社交をその力の基盤とするという点についてはどうだろうか。それはゴシップの好ましい側面、「美味しい」ところだけをひろいあげる、フェミニズムの側からの、我田引水、ひいきの引き倒しとはいえないか。女たちがゴシップ・噂話を通じて手を取り合い連帯を組むというのは、ゴシップ・噂話の一面しか見ない、楽観的の見方といわれても仕方がない。

たわいのない噂話、罪のないゴシップ、絆という恵みをもたらすゴシップ、それは認めよう。しかし同時に、ゴシップ・噂話を生み醸成させた人々の心に巣くっていたのは、たとえば不安、恐怖、敵意、悪意、羨望、妬み、嫉み、嫌悪というようなものではなかったか。そのうえ、ゴシップはその輪の内側にいるものにはひとときの安堵・悦び・仲間意識を与えるが、輪の外の人間に対しては牙を剥き、ゴシップのスケイプゴートをこきおろし、指弾、排除することも厭わない。スパックスはゴシップのそうした「ダークサイド」を見てみぬ振りをしているのではないか。

エマが「口うるさいといったらありゃしない、ハイベリーのゴシップ屋」といい、エリザベス・ベネットがその存在に脅威を感じていた、メリトンの口さがない「唾棄すべき意地の悪い老夫人」たちのことである。ゴシップで命を落とすことはないかもしれないが、ゴシップは人々を監視し、束縛し、さらには一人ひとりの心に内面化され、規律ともなって、共同体の人々のそして私たちの一挙手一投足を監視・拘束することになる。「たかがゴシップ」では済まない、「されどゴシップ」なのです。

2 監視と束縛のゴシップ

「ハイベリー村では、ミス・ホーキンスの名前が話題にのぼってから一週間もしないうちに、彼女は容姿も知性もすばらしいという評判があちこ

ちから聞こえてきた。(中略) エルトン氏が意気揚々と村に帰ってきて、さて、これから幸せな結婚生活や、彼女の美点について語ろうとしたときには、彼が言うことはほとんどなかった。(『エマ』22章)

ミス・ホーキンスはブリストルの商人の娘で、一万ポンドの財産、冬は毎年バースで過ごすこと、両親はすでに無く、叔父は「あくせく働く事務弁護士、出世するほどの能力はなさそう、自慢できる親類縁者は、たった一人の姉だけでその姉は玉の輿に乗り、馬車を二台所有し、ブリストル近郊に豪邸を構えている」(『エマ』22章)。花嫁が村に姿を現す前にすでにこれだけの情報がゴシップもまじえて村じゅうを飛び交い、取沙汰されている。あるいはウェストン氏の先妻の息子フランク・チャーチルも村にやってくる以前から村じゅう彼の話題でもちきり、来れば来たで、彼がロンドンまで散髪に出かけたこと、村のフォード商店での買い物までもが知れ渡る。

容姿や人となりはもちろんのこと、財産、縁戚関係、当人の趣味嗜好、日常の行動に至るまで事細かに報告され回覧されるのである。フランクもミス・ホーキンスもそれほどの厳しい監視にさらされるのは余所者の新来者だからではないかといわれそうだが、この点では共同体の内部の人々についての点検・監視も、余所者へのそれに劣らず詳細で徹底している。医師ペリーがついに馬車の購入を目論んでいるのではないか、新興成金のコール家がロンドンでの商売繁盛のおかげでこたま儲けていること、エルトン牧師の行動となればそれこそ逐一が観察・報告・点検・取沙汰される有り様。悪意、嫉妬、妬み、ライバル意識、ときには共感や憧憬もいりまじって、それらが複雑に絡み合い、交錯するゴシップ、そのようなゴシップの「ゆるやかな監視」が共同体の一人ひとりを真綿でくるむように包囲している。

真綿で首を絞められるといえば、ミス・ベイツの姪ジェイン・フェアファクス、雨の日に手紙を出しに外出したところを見咎められて、その「無謀さ」が

たちまちのうちに、人々の「善意のゴシップ」にさらされる。心配してくれるのはありがたいが、「たまにひとりになると、ほんとうにほっとするわ！」とは彼女の偽らざる本音だろう。何事につけ強引に首を突っ込んで迷惑なお節介に余念の無いゴシップ屋たち。

これは「ご近所のスパイ」を論じた別稿でも触れたところだが再度記す。『高慢と偏見』のベネット家の末娘の駆け落ちに際してのヒロインの言葉。

「(村の意地の悪い老夫人など) 家にひっこんでくれればよかったのに、悪気はないんでしょうけど、こういう不幸の時はご近所の衆はなるだけ顔出ししてくれない方がいいんだわ。手助けなんかできるもんじゃないし、お見舞いなんか言われたって、かえってたまらないわ。遠くから見て、いい気味だと思ってるだけにしてくれた方がいいんだわ」。(『高慢と偏見』47章)

エリザベスは同情を装ったゴシップの悪意と連中の密かな悦びを見逃していない。「ゴシップは共同体を一つに束ねる、同時にゴシップは監視と抑制をもたらす。ゴシップはあてこすり、噂、村八分にするぞという脅し、密かな圧力をかけることによって、共同体の内部から規制する言説である」⁽²⁰⁾。

3 ゴシップという名の「真理」

駆け落ちをしでかしたベネット家の末娘は、もしヒーロー、ダーシー氏の特権による裏工作、駆け落ちという不名誉を金の力でもみ消すという援助がなかったならば、文字通り村八分となっていたらう。

自墮落ではねっかえりの、世界は自分を中心にまわっているのだといわんばかりのリディア・ベネット、それはそうなのだが、翻ってみれば、彼女は己の本能に忠実、己の快樂を貪欲に追求しただけではないか。そういう彼女をまか

り間違えば売春婦に身を落とすしかないまでに追い詰めたのはなんだったのか。治安判事などの警察・司法権力がそうしたのではなかった。

「メリトンじゅうの人はよってたかって、三月前には光の天使にまでされていた人を、なんとかこきおろそうとしているように思われた。彼は、土地の商人という商人には借金をしているように言われ、誘惑という美名をつけられたその陰謀は、あらゆる商人の家庭に及んでいるととりざたされた。誰もが、彼は世界中でいちばんの悪党だと言い、そういえばあの善人そうな感じは最初から怪しいと思っていたのだ、などと言いだした。エリザベスは噂の半分はつくり話だと思ったが、それにしても、リディアの一生は台無しだという確信はますます動かぬものとなった」。(『高慢と偏見』48章)

あるいは、ダーシーがいかにかいかにひどい仕打ちをしたのかの話をウィッカムが語り、それが人々の耳に達すると、「人々は事情を知らないくせに、いかにダーシーを嫌っているかと喜んで思う」。「ウィッカムはダーシー氏の父親から聖職禄を約束されていたのに、ダーシー氏がその約束を反故にしてしまったという話は、いまはみんなに知れ渡って、おおっぴらに話題にされるようになった。みんなはこの事実を知って、ダーシーは前から嫌いだったが、やはりそういう男だったのかと納得して喜んだ」(『高慢と偏見』24章)。

「村じゅうの人が」「みんなが」「誰もが」この、Everybody が曲者なのだ。軽薄な風見鶏、欲張りで狡賢くて無責任、そういう連中たちがエブリボディというゴシップの輪を形成しているのか。彼らは自分にとって好ましいのであれば、その正体などお構いなしに寛大で盲目同然、逆に意に沿わないとなれば容赦しない。自分の見込み違いなどすっぱり忘れて、事実でさえも歪めて憚らない。こういう手合いこそが、共同体を監視し、点検し、すきあらば陰口を叩き、

ゴシップに耽る。駆け落ちをしでかした娘の一家に口先では「大変ですわね」と同情を装いながら、災厄の降りかかったベネット家に内心ほくそ笑んでいるのだ。

それだけではない、不行跡をしでかした娘に後ろ指を差し、指弾追放の石を投げさえする。それにしてもどうしてそこまで？ゴシップ・噂話が、いや、より正確に言えば、エブリボディー一人ひとりのなかに刷り込まれた「駆け落ちは不道徳」というひとつの「社会的規律」がある種の真理となって娘の不始末を罰するのではないか。もとをただせばたんなる噂話や無責任な憶測に過ぎなかったゴシップが一つの規律ひいては「真理」となって独り歩きを始めるのである。

フーコーによれば、権力はトップダウンに働くだけではない、様々な言説が社会のあらゆるレベルで、「真理」の座を獲得すべく抗争しているという。だとすれば女の言説にも、エブリボディーの言説にも「真理」を主張する権利は等しくあることになる。その起源を特定できず、それゆえに偏在する「匿名の総意」ともいべきゴシップ・噂話はこれほど強力無敵なものはない。ゴシップは「ミクロの権力」としてあるいは「影の権力」として絶大である。

「大金持ちの独身男性は必ずや妻を必要としている」という、一部の母娘たちの願望や思い込みもまた“a truth universally acknowledged”の資格十分なのである。この言葉の「真実」は『高慢と偏見』の結末でそれが文字通り真実であったことが証明される。豪壮なペンパレーのお屋敷に実現されたこの真実はそのことによって更なる信憑性を獲得し、「真実の座」を確固たるものにしてゆくのか。

エマ・テナントの『続高慢と偏見』⁽²¹⁾では、冒頭「もう一つの真理」が語られている。「財産があってすでに結婚している男なら、跡継ぎの息子を欲しがっているはずだというのは、ひろく世間に認められている真理である」。この真理もまた「真理」であるからには、それを信仰するものたちもあって、子供のできない妻たちを苦しめることになるのか。

IV 覇権の行方

「下剋上」の物語

「もうひとつの」「隠れた」という形容詞つきとはいえ、「真理」となれば、根も葉もない噂話、無責任なゴシップといえども隠然たる力を発揮し、その影響力は侮れない。

ましてや伝統的な確固とした階級社会が揺らぎ、ほころびが目立ち始めたときである。メアリー・プーヴィはオースティンの生きた時代（1775-1817）を「イギリス階級社会の伝統的階層性への異議申し立て」の時代とした。「イギリス社会はそれぞれの異なる各層が互いにもちつもたれつしながらもしっかりと調和的に結ばれてきた、少なくとも18世紀後半までは、ところがその各層を繋ぐ絆が過去三十年のあいだに大きく損なわれ、あるいは根こそぎにされてしまった」という1817年時点でのワズワースの証言を引用し、そうであれば何がそうした変化をもたらしたのかと問うて、「18世紀中期から後期の農業資本主義、なかんずく資本主義が不可避的に持ち込む、人々の行動と価値観」を挙げている。「19世紀初期になると特定の階級に生まれたことでその人間の将来の社会的・経済的ステイタスが決まってしまうわけでもなく、上の階級からの庇護が特権を保証するものでもなくなった。（中略）ジェントリーの誇る伝統的権威、彼らのライフ・スタイルの価値についても、その当否が議論的となった」⁽²²⁾。

オースティンの魅力を語る様々なリーディングがある。ロマンティック・ラヴ・コメディの作家、繊細な観察を武器とする軽やかなアイロニスト、父権制の基盤をそれとは意識させずに切り崩すフェミニスト。そしてもう一人、共同体とそこに暮らす人々の生態を詳細に観察し、社会の微妙な動向を記録するオースティン、それはときとして人類学者顔負けの共同体の全貌を明らかにするも

のである。

そう、恋愛と結婚のオースティンではなく、「下剋上の物語」としての『高慢と偏見』『エマ』である。紳士階級の底辺にいる程度の家の娘が、限嗣相続、品性よろしからぬ母や妹、上流階級からは蔑まれていた弁護士やチープサイドの商人の母方の親戚、そうした数々のハンデを背負いながらも、長女はイングランド北部の新興成金の二代目となる息子をゲット。次女は、代々の名門地主の跡継ぎが恋に目がくらんで、はるかに格下の「紳士の娘」を「玉の輿」に乗せてしまった。「下剋上」という言葉が本来「下から上へ」とすれば、ここでは名門地主の御曹司がすなわち上の者が垣根を越境してヒロインと結ばれる。

上二人の姉とは違って末娘は結婚によって幸福を手にはなかった。しかし考えてみれば、本能のままに行動し、物欲、性欲旺盛で傍若無人な末娘は、「愛情を感じられる相手でなければ結婚できない」として、その近代的個人の主張ゆえに賞賛されるヒロイン以上に時代に先駆ける新しい女とも言える。弱冠十五歳にしてである。女の礼儀作法などこ吹く風、家の体面、社会の掟さえも涼しい顔で踏みつけにしてゆく。姉たちのように玉の輿に乗って幸福な結婚はできなかったが、このはねっかえりの横紙破りの小娘は旧来のヒエラルキーの土台を揺るがし転覆させかねないエネルギーに溢れている。男前の女たらしで、借金まみれの軍人との駆け落ちと結婚、ほとんどアナーキーすれすれの彼女の言動はやがてくる本格的「下剋上の時代」の先触れではなかったか。

下剋上といえば、『高慢と偏見』の結末でヒロインの嫁入りの後に、由緒正しいペンバレーのお屋敷に出入りを許されるのが、名門の「血の穢れ」を恐れられていたロンドンの商人夫妻であったことは暗示的だ。不行跡をしでかした駆け落ち夫妻のその後は不明だが、血統を誇る名門地主の屋敷には、世が世であればあり得ないことに、チープサイドに店を構える商人風情が釣竿を手を闊歩することになる。

『エマ』の下剋上は『高慢と偏見』のそれ以上にいっそう詳細に鮮やかに刻

印されている。『エマ』のオースティンには他のどの作品にもまして人類学者あるいは社会史家の視線が支配的だ。

階層の下位から上位へのし上がってゆく下剋上をもっともよく体现しているのがコール家である。

コール家がハイベリーに移り住んでから何年になるか、彼らは親しみももてて、気さくで、気取りのない、たいそういい人たちだった。その反面彼らは低い身分の出で商売に携わっており、洗練の度合いもほどほどといったところだった。ここに移り住んだ頃には収入に応じたひっそりした暮らしぶり、人ともあまりつきあわず、つきあい方もつつましかったが、運命の女神が微笑んでロンドンの会社が大いに儲かった結果、ここの二年で収入もかなり増えた。(中略)この頃までには、財産といい暮らしぶりといいハートフィールドの一族に次ぐ勢いになった」。、『エマ』25章)

コール家が階層を着実に一步一步登り詰め、旧体制の有力者にたいしても敬意を失うことなく、地道に下剋上を実現してきたとすれば、ブリストル出身の新興成金、ミス・ホーキンスはその財力と派手な消費によって、共同体の旧社会に殴りこみをかけるといったところだろうか。停滞と退屈の共同体、その旧態依然ぶりを見下し、なにかにつけ姉の嫁ぎ先の洗練を引き合いに出さずには済まない、度し難い確信犯的俗物、エルトン夫人。コール家がまるでミドル・クラスのお手本とでもいうように堅実に地歩を固め頭角を現し、今や旧勢力を脅かす、そうかと思えば新参の牧師夫人は他のゴシップ屋の夫人連中を牛耳って、ずうずうしくも旧体制を乗っ取らばかりの勢い。

下剋上はしかし財力や社会的地位だけに留まらない。教養、恋愛、消費の局面でも、新興のあるいは下位の人々が力を得ておおっぴらにその存在を主張する。たかだか自営農民の分際でと見くびっていたロバート・マーティン、彼が

ハリエットに宛てた手紙はその文面の格調の高さといい教養の度合いといい、旧体制の頂点にいるヒロインを驚かせる。

あるいは商人の私生児ハリエット・スミス、そんな彼女が、最初は自営農民の男性、次には土地の有力者の一人である牧師、ついにはあろうことか伝統と格式を誇る共同体きっての名門の当主に恋心を抱く、そこまで思い上がるのだ。賢くもなく、ただのお喋り、可愛らしいだけが取り柄の私生児は恋愛における伝統的階層性を揺るがす。

常に最新のアクセサリを身につけ、伝統的保守の共同体に軽薄な当世風を持ち込もうとするエルトン夫人、ケーキの作り方からカード・パーティには氷を、音楽クラブの創設など。派手な消費と自称上流仕込みの「洗練」をこれみよがしに見せびらかす、でしゃばり、目立ちたがり屋、救いがたい俗物。しかし別の角度から見れば、これほど正直に自分の心をさらけ出す人も珍しい。村一番のステイタスを誇るナイトリー氏をつかまえて「ナイトリー」と呼び捨てにするこの新参者は共同体のヒエラルキーを率先して打破する。ベネット家の末娘がそのむきだしの欲望によって伝統的社会の土台を揺るがしたように、この牧師夫人もまたミドル・クラスの十八番ともいべき俗物性によって既成の階層性に風穴を開ける。

俗物振りを全開にして、当世風の生活スタイルを誇示し実践するエルトン夫人はたんに軽薄で趣味の悪い牧師夫人に留まらない。夫人の出身地がアフリカ奴隷貿易の基地港ブリストルであること、自分のペットとして飼いならそうとしたジェインをガヴァネスの「市場」にできるだけ高値で売りつけようと画策するエルトン夫人。M. Butler がそういう夫人の背後に、やがて来る市場資本主義、さらには帝国主義の予兆を読み取ったのはけだし慧眼というべきか。さらに続けてハイベリーの未来について、「近い将来ハイベリーは繁栄する消費社会の町になってゆくのではないか、エルトン夫人こそがリーダーとなって、コール家、コックス家、ペリー家などを牛耳ってゆく。(中略) その一方で新

しいハイペリーではミス・ベイツの魅力は色あせて、完全に過去の人となってしまう。「伝統的な紳士階級が退いて、新しい金持ちの階級が年毎に同類の新たな成員を組み込んでゆく」⁽²³⁾。

経済的社会的あるいは文化の領域においても、下剋上を促し、加速させるのに貢献したのがゴシップ・噂話とは言えまいか。私生児の身ながら、恋愛の下剋上を実践したハリエットはまた旧勢力の有力者たちとは異なる、共同体の下位・周縁のニュース・ゴシップを供給するお喋りだった。ゴシップ屋の女たちが集うベイツ家の居間は共同体の噂話・ゴシップの生まれる場所であり、四方八方に伝達される中継地点でもあった。従来 of 男の言説、支配的言説に取って代わるとまではいえないにしても、出所不明の胡散臭い噂話、女たちの取るに足らない言説が、それが真理かどうかなどお構いなしに、共同体の覇権を主張する。

『エマ』の最終章最後の一節。「(エマとナイトリー) ふたりの結婚式は、普通の結婚式とほとんど同じだった。花婿も花嫁も、派手に着飾ったり、見せびらかしたりする趣味はなかった。夫から式の様子をくわしく聞かされたエルトン夫人は、自分の結婚式よりはるかに劣ったみすばらしい結婚式だと思った」。

「白のサテンはほとんど使われていないし、レースのヴェールもほんのすこしだけ。ほんとにあわれな結婚式ね！」(『エマ』55章) だとすれば、この名門と町一番の有力者の娘の結婚はハイペリーという共同体の旧秩序最後の慶事でもあったろうか。「サテンとレースをけちった花嫁衣裳」は格好のゴシップとして後々語り継がれることになるのではないか。

註

- (1) 酒井順子『枕草子 Remix』, p. 23, 新潮社, 2004年。
- (2) Patricia Meyer Spacks, *Gossip*, Alfred A. Knopf, 1985.
- (3) *Ibid.*, pp. 10-11.

- (4) *Ibid.*, pp. 22-23.
- (5) 富山多佳夫『ボパイの影に』p. 1, みすず書房, 1996.
- (6) 富山多佳夫『文化と精読』p. 40, 名古屋大学出版会, 2003.
- (7) Marilyn Butler, *Jane Austen and The War of Ideas*, Clarendon Press, 1987.
- (8) Alistair W. Duckworth, *The Improvement of the Estate*, The Johns Hopkins University Press, 1994.
- (9) Edward W. Said, *Culture and Imperialism*, Vintage Books, 1994.
- (10) D. W. Harding, 'Regulated Hatred', in *Regulated Hatred and Other Essays on Jane Austen*, The Athlone Press, 1998.
- (11) Terry Castle, 'Was Jane Austen Gay?' in *Boss Ladies, Watch Out!*, Routledge, 2002.
- (12) Eve Kosofsky Sedgwick, 'Jane Austen and the Masturbating Girl,' *Critical Inquiry* 17 (Summer 1991), pp. 818-837.
- (13) ミシェル・フーコー, 『狂気の歴史』, 『監獄の誕生』
- (14) Marilyn Butler, Introduction to Everyman's Library, *Emma*, p. XXIV.
- (15) P. M. Spacks, *op. cit.*, p. 147.
- (16) Julia Prewitt Brown, *Jane Austen's Novels Social Change and Literary Form*, pp. 111-113, Harvard University Press, 1979.
- (17) Marilyn Butler, *op. cit.*, p. XX.
- (18) P. M. Spacks, *op. cit.*, pp. 42-6.
- (19) 富士川義之, 「ゴシップの漂う別世界」, 『ユリイカ』, 1988年1月号(傍点筆者)。
- (20) Casey Finch and Peter Bowen, "The Tittle-Tattle of Highbury": Gossip and Free Indirect Style in *Emma*, in *Case Studies in Contemporary Criticism Jane Austen Emma*, pp. 543-544, Bedford/St. Martin's, 2002.
- (21) エマ・テナント『続高慢と偏見』, 小野寺健訳, ちくま文庫, 2006年, 原題は *PEMBERLY: A Sequel to Pride and Prejudice*。
- (22) Mary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer*, p. 180, Univ. of Chicago, 1985.
- (23) Marilyn Butler, *op. cit.*, pp. VI-VII.

翻訳については下記を引用, 参照させていただきました。

『高慢と偏見』富田彬訳, 岩波文庫

『エマ』中野康司訳, ちくま文庫